

Title	J・ J・ スペングラ W・ R・ アレン編 経済思想論文集
Sub Title	
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.5 (1961. 5) ,p.434(88)- 435(89)
JaLC DOI	10.14991/001.19610501-0088
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610501-0088

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

自由人が両極分解して行くということ、従って王の自由人は、王の自由人であると共に王の質子貢納人であるという二面的性格をもつという主張の正しさを確認する。しかしこのことは決して古典学説のゲフォルグシャフト↓ワザリテートの要因がフランク社会に存在することを否定することではなく、まさに封建知行のこの側面によって、フランク国家は後期封建国家から区別されるのである。

そして、ここにドイツ帝国及び王権から発する知行と諸侯の知行の並行的な二元的な知行構造の社会的基盤があり、フランス知行制と決定的に異なる理由があるのである。

さて第六章では以上のようなフランク王国の史的展開の過程で、王の自由人の転化した王の質子貢納人が、ドイツ中世の農民層に合流して行くことが実証され、第七章ではこの質子貢納人の転化した上級農民に対し、等族にいれられぬ最下層の非自由農民が考察される。

そして第二編「フランク時代の王領地」では王権の物的土台としての王領地の問題が分析される。第一章「資財帳簿例」では管区により構成される王領地の軍事的、経済的構造

を分析し、第二章ではクアレティエン帝国質子帳をめぐる諸問題、最後に第三章ではロルシュ帝国質子帳を中心として王領地とそれをめぐる複雑な人間関係、歴史的條件を分析している。

かくして本書は中世初期のドイツの封建社会成立史を特に国家との関係においてとらえ、フランク社会の構造的な分析を、豊富な史料及び学説紹介によりつつ行わんとした点において、この問題に関心のある人々にとって極めて貴重な研究書である。但し初学者にとっては予備的な学習と共に本書を読む必要がある。(泉文堂・A5・二九四頁・七〇〇円)

—寺尾 誠—

WJ・J・スベングラール編

『経済思想論文集』

(Essays in Economic Thought: Aris-totle to Marshall, edited by Joseph J. Spengler and William R. Allen, 1960) 貴重な研究は必ずしも単行本のかたちをと

るので、ビブリオグラフィはついていない。

* * * 白井 厚

花井益一著

『価値と貨幣』

本書は花井氏が一九五三年から一九五九年にかけて、富大紀要経済学部論集、経済評論などに発表された価値論関係の諸論文を収録したものである。

戦後のわが国におけるマルクス価値論の研究は数多くの論争を経て、厩大な文献を累積するにいたった。しかしこれらの論争が、どれほどマルクス経済学の発展に貢献したかという点については疑問を感じないではない。価値論に関する論争は、論争のための論争という観を呈し、なんらの解決もあたえていないように思われる。この原因が価値論の研究が、価値論そのものの解釈に終始し、より具体的な理論との関連を失ったことにあると考えることは不当ではないであろう。

いいかえるならば、価値論は経済を分析するためのアパレイタスであることを認識していなかった点にあるのではないだろうか。

らないで、しばしば学術雑誌に発表されたままとなつていたので、よほど丹念に調べていないと見逃すことが多い。この書は、一九三〇年代から今日に至るまでの間に、The Southern Economic Journal, The American Economic Review, The Quarterly Journal of Economics, The Journal of Political Economy, The South African Journal of Economics, The Economic Journal, The Canadian Journal of Economics and Political Science, Economica, The Review of Economic Studies などに発表された経済思想に関する重要な論文三一篇を集めたもので、巻末にくわしい索引が付き、極めて便利なものである。スコラ哲学、重商主義、古典学派、マルクス、歴史学派、制度学派、限界学派、新古典学派など六部門に分れ、それぞれに、「この諸論文に扱われた主題を経済学史の発展の中に位置づけ、またこれらの論文とは違って扱われたり、または全く扱われなかったような関連した題材を示すために」(Preface)序論が添えられている。編者は古代ギリシヤからマインシャルに至る

本書に収録された諸論文も、わが国における価値論研究のこのような面をはっきりとみせている。著者は序で、本書の論文はどれも「精密な思考を瀟瀟して書いた」ものであり、また「カッコつきのニセ・オリジナリチ」ではなく「真のオリジナリチ」をうちだそうとしたと書かれている。しかしこの「真のオリジナリチ」はあくまでも解釈の「オリジナリチ」であって、価値論研究に新しい方向をあたえるような「オリジナリチ」ではない。むしろ本書の意義は価値論の日本の性格を認識させ、価値論研究への反省を促すことにあるかもしれない。収録論文が戦後の論争の多くの問題にわたっていることもこれをたすけるであろう。なお本書に収録されている論文はつぎのとおりである。

- 第一部 (一)「生産力表現としての使用価値——使用価値Ⅱ生産力表現・価値Ⅱ生産関係表現——」一九五三 (二)「複雑労働の還元をめぐる諸問題」一九五四 (三)「価値法則の現象的解釈——山本二三九氏の主張にたいする反論——」一九五五 (四)「価値法則と市場価値」一九五八 (五)「国際価値法則」一九五九
- 第二部 (一)「商品の貨幣への転化——方法論